

第十一章 洋書輸入の傾向

一 洋書界の動き

ところで内田魯庵は「学鑑」の編集者としても、広告文案作成者としても、独自の才能を奮っていたが、入社（明治三十三年）以来洋書輸入撰択に関する相談にあずかっていた。彼の死後いくばくもなくして昭和四年十二月一日、書籍部洋書関係の組織に改変が行われ、新たに審査課が設けられた。この課の仕事は、洋書の撰出、注文部の数の決定、洋書の分類とストックリーフの作製、目録、アナンスメント等宣伝文書の作製、売行調査、並に古書の仕入販売等を取扱い、宛も洋書部門の事務センターと云う感を呈した。この結果、従来の洋書商品課は、現品の保管及び各販売部門の請求による品物の出し入れのみを担当し、また仕入課は外国課と改名し、審査課で決定された注文に従って、海外版元への発注から着品にいたるまでの事務を取扱うようになった。

尚、この機構改革によって組織された審査課の内容は次表の通りであるが、この改革は洋書部門としては相当思い切った組織変更で、改革に当っては周到な配慮がなされただけあって、今日にいたるも尚大略そのまま踏襲されているのである。



内田魯庵は素より文学者で、初めは英国流の鑑賞的啓蒙批評から出発したが、のちロシア文学に親しむようになり、文芸と社会並に人生との関連を重視する傾向を示した。彼がドストエフスキの「罪と罰」を翻譯し、またトルストイの「復活」を訳して丸善から出版したのも、彼の思想傾向を物語るものであると言えよう。このような素質を持った人が、洋書の撰択に重要な発言の機会が与えられ、それが採択されたとすれば、大正から昭和初世への政変と思想の混乱に係わることなく、丸善が外国の文学書を輸入していた事情は略々了解することが出来ると言えよう。大正初期にどのような種類の書籍が輸入されたかを記した「福本初太郎メモ」によると、当時わが国でもよく知られていた Ibsen, Conan Doyle, Tolstoy, Grimm, Goethe, Stevenson, Hugo, Heine, E. Zola, Dostoevsky, Gorki, Balzac, Schiller, Lessing, Romain Rolland, Hauptman, Molière, の作家名と作品を、政治的なものとして、古くから著名な “Rousseaux-Contract Social ou Principes du Droit Politique” 及び “Montesquieu De l'Esprit des Lois” 社会主義的なものとしては “Sombart- Socialism and the Social Movement” “K. Marx- Das Kapital” 及び “Marx und Engels- Manifest der Kommunistischen Partie” を挙げてゐる。福本初太郎は

主として哲学・宗教関係の書籍を取扱っていたので、その「メモ」には政治・社会主義関係のものが少ないが、山崎民雄の提供した資料によるとトロッキーほか社会主義関係の書物も多量に輸入されていた。彼の談話録によれば「L. Trotsky-Bolsheviks and World Peace」は、五〇〇部注文して、店頭に並べたところ二週間で二〇〇部売れ、残り三〇〇部は警視庁に押収されてしまったという。

昭和二年から三年にかけて、田中義一内閣がとった対中国、対満州政策は、いよいよ積極的になり、内政干渉が露骨に行われて、欧米諸国の輦蹙をかうに至った。このため改めて中国問題が再検討されるようになり、これに関する洋書も多数出版された。丸善はこれまで、科学、工業、歴史地理、文学、美術書等の洋書を輸入して、これをわが国に紹介して来たが、外交上ひいては国際問題がこのように大きくクローズアップされてくると無関心ではあり得なかった。そのため中国を取扱った洋書の輸入が盛んに行われ、学鐙の広告欄を大いに賑わした。昭和三年前期だけでも次のような代表作が紹介されている。

Sun Yat-sen- The International Development of China.

Kenneth S. Latourette- The Development of China.

Chaochu Wu- The Nationalist Program for China.

Louise Jordan Milne- The Soul of China.

更に、満州事変の勃発による軍の満州進出等で極東への関心が高まり、これに呼応するかの如く、ドイツのナチス党、イタリーのファシスト党などの独裁政權樹立は、欧米の政界を動かし、改めて第一次世界大戦の起因や、そ

の経緯を詳らかにする試みが起り、これに関する著書の大量出版を見た。

ところで昭和六年十二月二十三日、二十四日の両日「都新聞」に連載された元社員中村春太郎の「国民は何を知らうとしたか」(本年の洋書界の動き)と云う一文があるからこゝに引用しておこう。

社会人として、はた個人として一般国民は如何なるものに関心を持つてゐるか、それを数字的に如実に語るものは読書界の傾向であります。

読書界を觀て私達はハッキリ世人の関心と、世の中の動きとを知ることが出来ます。実に読書界こそは社会動向の一種のバロメーターであると云つても過言ではありません。然らばどんな書籍が今年は読書界に多く要求されたか、次に私の専らたづさはる處の洋書に就いて述べてみませう。年末に際しこの一年を洋書を通じて回顧してみますと、私達はそこに一九三一年の相を可成り的確に知ることが出来て、誠に興味津々たるものがあります。先づ大体に申しますと上半期は比較的平穩でありましたが、下半期に入つてからは読書界は活発な歩みを歩んで居ます。で、今年はどんな本が要求されたかを先づ大きく分類してみますと、一、世界的不況に關するもの、二、時局問題、三、運動に關するもの、四、哲学、科学に關するもの、五、グラフ類……と云ふこの五ツに大別されます。こゝに挙げたものは何れも広汎な読者層に亘つて今年最も多く読まれたもので、決して従來の如く一部インテリや専門家などに読まれたものではありません。即ち僅四十や五十部の要求があつたのではなく、少くとも五百部以上も売れた本のみです。一九三一年と云ふ年は如何に是等の事象に熱烈な関

心を持つたかが判ります。ではこれから右の五ツの各々に就いて著者、名称、発行所など細説することゝ致しませう。先づ（一）世界的不況に関するものです。御承知の通り今年は年頭から世界的不況の年でした。世人が景気不景気に極度の関心を持つて一体この先どうなるのであらうか……と云ふやうな気持が読書に反映したものだと思はれ真に無理もない事です。これは主として上半期から下半期の初めにかけて多く読まれたやうです。之を更に細別すると（イ）景気回復に関するもの（ロ）金の問題（ハ）各国の経済財政問題となります。例へば（イ）は景気循環論とも云ふべきピアソン（米）のフォアキャスティング・ビジネスサイクル（九円）ミツチエル（米）のビジネスサイクル（十五円）（ロ）はフィッシャ（英）のマネー・イリュージョン（三円七五）ケーンズ（英）のトリートイース・オン・マネー（二冊十五円）ラフリン（米）のマネー・クレディット・エンド・プライス（二冊廿円）（ハ）は各国の失業問題、英国の政変、ソヴィエツト五個年計画の成功に就いて……などに細別されますが、英国の政変その物は割合に問題にならなかつたやうで、政変に関する政策上の細かい要求は余りないやうでした。ただその後に来たるもの……即ち政変後の自由貿易か保護貿易かと云ふ問題は非常に読まれた……この辺は面白い現象と思はれます。アインチツヒ（英）のファイト・フォア・フィナンシャル・スプレマシー（三円七五）は和訳まで出来凄い売行。次いで世界的経済危機を語るには必須であり且非常に読みよい同氏のワールド・エコノミック・クライシス（三円七五）国際聯盟のワールド・エコノミック・デプレッション（三円）英政府発行のマクラミンズ委員会報告書（二円七五）同メーイ委員会報告書（二円二）で、この二著は英国の雑誌や新聞でも相当論評され問題の書ですが我国では前者は銀行会社方面に非常に受け、

後者は政治家に愛読された。ジークフリード（英）のイングラント・クライシス（五円二五）はかの減俸問題当時の我国の状態に似てゐる處を取扱つてゐるので評判となり、また子供にも解るやうに解説されて居り且つ米国で大変に読まれたイーリン（米）のニューラシアン・ブライマー（三元五）カウツキー（英）の五ヶ年計画批判書ボルシェビズム・アト・エ・デッドロック（三元）は殊に英日とも老若問はず読まれ、クヌーブ（英）のリップドル・オブ・アネンプロイメント（二元二五）ビーベリツヂ（英）のコース・エンド・キューア・オブ・アネンプロイメントは日本では余り目をつけた人が無いが評判は非常に良く、英国では非常な売行を示してゐます。其他グリーンコ（英・米）のファイブ・イヤヤー・プラン・オブ・ゼ・サヴエート・ユニオン（二元五）と云ふ例の五ヶ年計画の本も非常に読まれました。

次には時局問題に関するもので、此れは（イ）軍縮に関するもの（ロ）賠償問題（ハ）満蒙問題及び国際聯盟の機構に就いて……の三ツに細別されます。賠償問題と満蒙問題は一般には問題が起つてから読まれ出し、従つて特に下半期に目立つてゐます。（イ）では何人ものエキスパートによつて書かれたサイエンティフィック・デイスアーマメント（二元五）が各方面の注意を惹き、それと相俟つてリチャードソンのエコノミック・デイスアーマメント（三元七五）が要求されてゐます。（ロ）では賠償問題の中心人物ドイツの前国立銀行総裁シャハトのゼ・エンド・オブ・リパレーションが凄い動きを見せ、次いでは英国政府の賠償問題報告公文書とも云ふべきオフィシアル・ドキュメント（エコノミック・コンミッション）（二元二五）が可成り要求されてゐます。又国民目下の最大関心事たる満蒙問題の書籍に就いては先づヤング（米）のジャパンズ・ユリスディク

シヨン・エンド・インターナショナル・レガールポジシヨン・イン・マンチュリア（三冊揃十五円）を挙げます。ヤング氏は毎年太平洋會議に出席した人で既にこの他にも滿蒙問題に関する二、三の著がある、これは我が国で非常に要求され、追加又追加と云ふ有様でした、次には滿鉄のセカンド・リポート・オン・ゼ・プログレス・イン・マンチュリア（三円五）は滿洲事変直前に出たものですが、日露戦争当時から歴史的に説き起し大變に立派な内容の本で英米兩タイムスとも激賞してゐますが、その割に日本では案外知れてないやうです。東亞經濟發行のマンチュリア・イヤーズブック（六円）は在留外国人に重宝がられてゐる。ヤコントフ（米）のロシア・エンド・ソヴェートユニオン・イン・ゼ・ファースト（十円）はロシアの極東政策を論じたもので、これ又我國民の最大関心事……今でも続々要求されてゐます。著者はケレンスキー政府時代の外交官次長。アドーヴェント（英）のトーチアード・チャイナ（六円）は外国人でこれ位判然と支那を觀て書いた人は無いと云ふ位で、余り正確に書いたので著者（紐育タイムス特派員？）は支那から処払ひを喰つたと云ふ噂まで出た……支那問題を論ずるには必携の書と云はれてゐます。其他各國の極東政策を書いたモルス・マクネール共著（米）のファースタン・インタナショナル・リレーシヨonz（九円）エデュー（米）のチャレンヂ・オブ・ゼ・イースト（五円）なども相当読まれました。兎に角、今迄は滿蒙問題の事は極一部の識者に読まれると云つてよい位でしたが、滿洲事変起るやガゼン一般的となり殊に滿蒙問題に関する外国人の著書は非常な注意を払はれてゐます。此れは独り書籍方面に限らず新聞雜誌皆しかりで英米兩タイムスなどは売切れ又売切れと云ふ有様でした。尚欧米のみならず相手國たる支那の言論も非常に留意されるものと見え、殊に支那の雜誌

(英文雜誌)のチャイニーズ・ネーションなどは相当多く要求されてゐます。この雜誌は極端に排日記事を満載してゐるやうですがそこがある意味で妙に受けてゐるやうです。又在留外国人も滿蒙問題には可成り関心を持つてゐるらしく、これ等の著書を要求するのは勿論、英文と漢字との滿蒙地図を盛んに要求して居ります。以上の著書などは今度の調査員も相当読んで居る或は読んで来るものと思はれますが、殊にトーチニアード・チャイナなどは調査員達のテキストブックと云はれてゐます。私達は読書界を通じてからも如何に滿蒙問題が日本国民は勿論世界人の焦点となつてゐるかを知り、真に興味津々たるものを覚えます。

二 特殊な洋書の買い方

尚、その他古老福本初太郎、八木佐吉等が書いた「洋書こぼれ話」という記録(洋書輸入協会会報掲載)があり、参考資料としてそれぞれ趣きがあるので序に抄録しておく。

明治回顧

福本初太郎

本の買い方いろいろ 学者が自分や学校で本を購入する場合、その人なりにいろいろの買い方をされる。目白の日本女子大学図書館には、かなりの洋書があった。それは初代の学長成瀬仁蔵先生が無類のビブリアファイルであつたためでしょう。

先生は教育者であると同時に「政治家」でもあつた。先生は学校の図書館に買入れる本を、ご自分で本棚か

らあまり選ばれることはしなかった。丸善へおいでになると、まず、どっかりと椅子に腰かけられて、私が挨拶に行くのを待たれた。私は先生の興味を持たれそうな、婦人問題、文化の問題、あまり専門的でない政治問題等の本を新刊書の棚から探し集めて先生のテーブルへ運んだ。先生はそのなかの二、三冊をペラペラと見ておられるうちに、やがて、スヤスヤと眠られてしまう。しばらくすると眼をさまされて曰く、「これを図書館へ届けて呉れ」と、いとも厳かに言われる。その場合いつも一冊残らず全部であった。こうなると、こちらも本を選ぶのに真剣にならざるを得ない。勿論お支払いは極上。

講義の材料集め　一橋高等商業の学長であった三浦新七先生は稀に見る読書家であった。先生の図書館長時代に招かれてある日鎌倉材木座のお宅にお邪魔をした。それこそ座敷いっぱいどころではなく、どの部屋もどの部屋も本本本、小さな図書館など、とても足下にも及ばなかった。

先生が或る時、「来年の学校の講義にポンペイの壁画を話したいから材料を集めて呉れ」と言われて苦心をしたことがあった。そこで型録による文献はもうすにおよばず、神田の古書店街を探し廻って若干の部数を集め責を果たしたことがある。若年の私にとって誠に光栄であった。

独乙人捕虜の読書　第一次世界大戦の結果、膠州湾の青島チンタウより独乙人捕虜の一部を浅草の東本願寺に收容したのは大正三年の暮だった。その捕虜のなかにはワルデック総督を初め、ユーベルシャー、ウエークマン等の学者もいた。

この連中が、東本願寺の收容所にいたある日、收容所から丸善に電話があつて「独乙人捕虜が本を読みたい

というから独乙人向きの本を持って来て呉れ」とのことであった。そこで、まず独乙語で書いた、日本案内、日本の歴史、地理、日本の物語、さては独和辞典まで、ありとあらゆる「日本」と文字のついている本をかき集め、人力車の底がしなう程積み込んで収容所に乗り込んだ。当時捕虜は金はたっぷり持っていたが外出は許されなかった。つまり宝の持ち腐れというところ。そこで考えたすえ、本を買うことに決めたものらしい。

三 輸入洋書の種別

洋書こぼれ話 八 木 佐 吉

大正十二年（一九二三）の関東大震災のあとは、その前年からの一般不況が、震災後ますます深刻さを加えてきていた。しかし、復興事業にともなう諸資料文献の要求が強く、書籍業界は、和書、洋書ともに、世間の不況をよそに、全体として向上線をたどっていたように記憶する。

関東大震災の数か月以前から、丸善では「ハームスウォース万国百科全書」(Harnsworth Universal Encyclopedia)全十二巻の予約募集を開始していた。この百科全書は「(第一次)世界大戦前後の世界の形勢、新しい思想の動き、科学、工学工業の進歩などを網羅し、世界文化の鳥瞰的縮図」といったような宣伝文句で拡売された。いわば通俗的百科全書であった。クロス装で 100 であり、一九二三年八月までに二度入荷して、売切れとなっていた。この百科が震災後一九二三年末から翌一九二四年にかけて、第三回以降の入荷の度ごとに、その手頃な内容が、読書界に大いに迎えられて、羽がはえたように売れた。

丸善の「学鑑」は九か月休刊して、一九二四（大正十三）年六月から復刊した。このころはヨーロッパも長い間の戦争のあとの反動で楽しみの本が、いろいろ出版され出してきた。対照的に、日本も震災後の落ちつきをやや見せてきたので、ロシヤン・バレーとか、Leon Bakst や Max Reinhardt の舞台装置、装飾関係の洋書が、特に目立って需要され輸入されている。

さて、考古学・美術書の洋書に話をうつそう。一九二二年に英国調査隊がエジプトでツタンカーメン王の墓を発掘して、そのすばらしい出土物のことが、世界中を衝動させていた。この詳細の報告書 H. Carter 著 Tomb of Tutankhamen (全三巻) の第一冊が、この年（一九二五年）出版されて評判であった。この本を皮切りにエジプトや中近東の考古書が引きつづき歓迎されだしてきた。一方、ラテンアメリカのインカ文明の本も、Ernst Fuhrmann-Reich der Inka とか Walter Lehman-Kunstgeschichte des alten Peru などが輸入され、一部の史家、好古家に珍重されている。

中央アジアの関係の発掘の書物は、溯れば Aurel Stein の Ancient Khotan が一九〇七年に、Ruins of Desert Cathay が一九二二年に、A. Grünwedel の Alt Kutscha が一九二〇年に英・独で出版され、それぞれすでに舶載輸入されていた。それらに輪をかけるように出版された Stein の大著 Serindia つづいて Thousand Buddha が一九二一年に出ているが、震災などで、大物の輸入が中断されたかたちのところ、一九二四―二五年ごろから、再入荷して、また一段と評判されたものである。

また、一方では、南蛮紅毛もの、キリシタン文献への一般関心も強まってきて、そのため東西交渉史の新古

の洋書の需要も盛んであった。James Murdoch の History of Japan の第三巻 The Tokugawa Epoch, 1652-1868 が J. H. Longford に依って編集されて一九二六年ロンドンで出た。これもこうした時世にそった出版の一つである。なお、マードックの日本歴史は第二巻が History of Japan during the Century of Early Foreign Intercourse, 1542-1651 としてすでに一九〇三年に山県五十雄と共著で神戸で出版され日本と西欧との交渉史として、内外で注目した書物であった。第一巻は From the Origins to the Arrival of the Portuguese in A. D. 1542 とし、一九一〇年に出ており、第三巻の上梓とともに既巻二冊も新版を売り出した。

一九三一年五月に丸善で Special Division Display on "Sociology, Economics and Commerce" という洋書の部門別、特別展示即売会を催した。その頃は思想的に取締りが大分やかましくなっており、⊗の字だけでもうるさく、その方面の洋書も輸入禁止で、ひっかゝるのが多かった。ところが、この目録には "Socialism" と並んで "Communism" の分類で一項目が立てられ数十点の⊗文献が収録されているのである。それから、附録古書広告に Marx の Das Kapital の初版 3 Bde. in 4. が ¥135. ーで出ている。

一九三〇年 "The Complete Journal of Townsend Harris. First American Consul General and Minister to Japan. Intro. & Notes by Mario Emilio Cosenza (Prof. of Classical Languages. The College of the City of New York). 8 vo, xix 六二〇頁が ニューヨークの Doubleday, Doran 社から (\$5, ¥10.) で出版された。本書は、異境に於ける生活を語ると共にアメリカの極東政策の経緯を明らかにし、特にわが幕末政府との交渉を密らかにしている点で幕末関係の歴史学者のみならず、一般読者にも真摯な興味をわかせた出版物

であった。のち、本書を玉城肇が邦訳して岩波文庫中に出版し、更に近年 Tuttle 社で本書の翻刻物を出版して現に市販されていることは、承知のごとくである。

このころ、大部数売れた一般性のある洋書を書き出してみると次の通りである。

H. G. Wells—Outline of History; a plain history of life and mankind.

H. G. Wells—Science of Life.

Manners and Customs of Mankind.

Peoples of All Nations. 7 vols.

Countries of the World. 6 vols.

Concise Universal Encyclopaedia.

I See All: The world's first picture encyclopaedia.